

司馬遼太郎

翔ぶが如く 二

司馬遼太郎
翔ぶが如く
二

文藝春秋





翔ぶが如く二

昭和五十一年二月五日 第一刷
昭和五十一年二月十五日 第三刷

著者 し ば りやう た ろう
司馬遼太郎

発行者
檜原雅春

発行所
株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三
電話(東京)二六五一二二一
郵便番号 一〇二

印刷所 大日本印刷
製本所 大口製本

*万一、落丁乱丁の場合はお取替えいたします

目次

千
絵
7

廟
堂
33

秋
の
霜
86

激
突
121

分
裂
145

右
大
臣
155

插
話
176

退
去
188

陸軍卿
238

大警視
260

明治七年
285

春の霜
326

混沌
346

装幀 栗屋 充

カバー写真・加曾利B縄文土器 部分（水戸・マロン美術館蔵）
扉写真・隼人の盾（奈良国立文化財研究所蔵）

翔
ぶ
が
如
く

(二)

千 絵

江戸の旗本屋敷で、十軒に二軒は雨戸が締めまり、蒸れと雨洩りと樋に落葉が溜まるために急速に朽ちはじめている。

市ヶ谷にはそういう屋敷が多い。

「片目屋敷」

と、ご一新前によばれていた屋敷が、富士見馬場のあたりにあった。芦名鞍負という千石取りの旗本の屋敷で、何代か前に生れつき右目のつぶれた当主がいてそう呼ばれたのか、それとも門長屋の窓がどういうわけか一つしかないために町方にそのように呼ばれていたのか、理由はわからない。

千 門の屋根が、かつての旗本屋敷としてはひどくめずら

しいことに茅ぶきであった。江戸は旧幕二百七十年間、火事で悩まされつづけた。茅ぶきは火の用心にわるく、早い時期から江戸の大名や旗本屋敷はみな瓦ぶきになっていたのが、芦名家の門ばかりが茅であったのについては伝説があるらしい。

家康の関東入部のときに奥州からきて仕官したこの家の先祖がこのあたりに土地をもらってにわかごしらえの屋敷をたてた。屋敷は諸士に先んじて第一番にできたが、しかし地均しもせずに急造した。門の柱なども曲った黒木をもちい、屋根はそのあたりの茅でふいたところ、家康が通りかかり、その早仕事をほめた。

その後、大目付などが火事の場合の配慮からしばしば瓦にあらためるように勧告したが、そのつど、その代の当主が「権現さまのお目にとまったものなれば」といつきかなかった。

そういうことは、どうでもよい。

この物語の時期である明治六年のはじめ、屋敷の近所に近衛の赤い帽子をかぶった薩摩弁の士官が数人やってきて、

「この屋敷の持主はどこにいるか」

とそのあたりの者にいき、持主の行方が知れないことがわかると、入りこんで私察のようにしてしまったのである。

そういう持主不明の屋敷が多かった。

徳川家処分というのは明治元年五月に決定した。一大名の地位に落ち、駿府（静岡）七十万石ということになって、俗に旗本八万騎といわれた家臣団を養えなくなり、身の振り方はかれらの自由ということになった。

いわば、徳川家から縁を切られた。それでも無縁ながら駿府へお供するという者もあれば知行地へ行つて帰農する者もあり、東京に残つて従来の家屋敷にそのまま住んでいる者もあるが、この間、戊辰戦争が継続し、あれやこれやに巻きこまれて家族が離散し屋敷が化物屋敷同然になっているのも多い。

「片目屋敷」

というこの家の当主や家族も、そういう悲運のなかに沈んでしまったものらしい。

この明治六年の夏は、日照りがつづいた。

「民情不穩」

と、川路の手もとに多くの報告書があつたのは、ひとつは日照りのためらしい。

関東の各郷各村では雨乞いのために農民たちが紙の旗をたてて辻々に集まり、また各地で水喧嘩も頻発した。竹やりをもちだすさわざのために、政府筋や新聞はそれを一揆とまちがえたりした。

維新後、諸式の値が急騰し、それだけでなく租税が高くなっている。

「天子さまの世の中になって、何もかも悪くなった。得をして世にときめいているのは薩長出身の朝臣だけだ」と、たれもがいった。

とくに士族と農民に不満の声が高い。士族は、世禄をうばわれて路頭に迷い、農民は旧幕時代と同率かそれ以上のぬいぐを支払わされる上、旧幕体制では掛からなかった物品の運上金を「官」とよばれる太政官政府に吸いあげられた。

歴史的に言えば明治政府ほどつらい政権はない。どの

国のどの時代の革命政權も前時代より租税を安くするところから施政を出発させるのが普通であるのに、旧幕府よりもはるかに民衆の財政負担を重くせざるをえなかった。その最大の理由は明治革命の主目的が近代国家になるためのものであったからだ。やってみたものの、近代国家というのはべらぼうに金のかかるものだった。近代的陸海軍をもたねばならず、交通・電信設備をもたねばならず、大学から、中学、小学校をととのえねばならなかった。新財源はほとんどなかった。財源が旧幕時代とほぼおなじで、百姓に米をつくらせてそれらの何割かを政府がとりあげるといふ仕組で、その仕組上にヨーロッパ式の近代国家をつくろうとするのは本来無理であった。政府財政からみれば日本は植民地になったほうがよかったかもしれない。

それらの無理は、百姓たちにし、わよせされた。このため各地で一揆がしきりにおこった。軍事實を負担させられるだけでなく、旧幕府もそれをしなかった徴兵の義務を百姓に課したのである。「国家は百姓がまもれ」というのが明治国家の方針であり、これによってフランスのよ

うな国民国家を成立させようというのがねらいであった。このため、「民情不穩」というのが、常態のようになった。水喧嘩でさえ反政府一揆かと神経をとがらさざるをえなくなった。

九月に入ると、雨の日が多くなった。各地の「民情」は一応静まった。そのころ、市ヶ谷富士見馬場の片目屋敷に、旅姿の若い婦人が入ってきた。

片目屋敷は、建坪が二百坪ほどあるだろう。

敷地の中でもっとも大きな部分を占めているのが、かつて家来や下僕の居住施設だった門長屋であった。次いで武器や什器（じしやうも)、歴代の当主夫人がもってきた嫁入り道具をおさめた三つの蔵が、大きな場所を占めている。

「おかしな女が入ってきたな」

と、この夕、門長屋を占領している薩摩系の近衛士官のひとりがいった。かれらは一つ鍋に牛肉を入れてめしを食っていた。白い洋式襦袢（じゆばん)にズボンという男もいれば、絆（かきりへこひ)に兵児帯という姿の者もいる。

「母屋へ入っちゃったかい？」

「うん、台所で見た」

と、たれかがいった。

近衛士官たちは、門長屋だけを使い、母屋は台所以外の場所は使用していない。座敷はずっと雨戸をしめ切ったきりであり、たとえ使おうにも畳が腐っていて、とても人の住める状況にはなかった。

「叩っ出せ」

と、一人が、土間でわらを打っている老僕に命じた。

老僕はきづちをゆっくりあげたが返事をせず、無表情のままトンと打ちおろした。

「十蔵」

と、たれかが呼んだ。

「きこえたと？」

十蔵はかつてこの屋敷に出入りしていた植木職で、いまはその職をやっていない。江戸から大名や旗本が消滅してこのかたもつとも困窮した職種は植木職であったかもしれない。十蔵も失職した。いまはこの士官たちの共同の下男としてやとわれているのである。

十蔵はくびに巻いた手拭をとり、それを丁寧にたたむ

と懷ろに押しこんだ。やがてかまちのそばまでゆき、腰をおとしてかがみこみ、右手をそとのばしてかまちに添えた。

「お暇をいただきます」

といったから、士官たちは驚いた。

みな十蔵の変化が理解できず、だまっていた。だまったらまま飯を食っていた。やがて一人が優しい笑顔になり、「何か、俺（おれ）は悪い事（こと）言（い）うたのかもしれないんどん。勘弁（かんぺん）せいや」

という意味のことを薩摩弁でいったが、十蔵には通じないようであった。「お暇を……」という言葉を探りかえした。

「あの娘（むすめ）をお前（まへ）さアは知（し）っちゃったとな？」

あの娘をお前は見知っておるのか、というのである。

十蔵も、先刻あの女を見た。十蔵が台所に入ろうとすると、女がひとりでかまどに薪（まき）を入れているのを見た。

十蔵は驚きのあまり声が出ず、そっと足音を忍ばせてこの門長屋にもどったが、その娘が、この屋敷の本来の当主である芦名頼負の息女であることに十蔵は気づいた。

が、信じがたいことでもあった。

（あの方はたしかにこのお屋敷のお姫さまに相違ない）
十蔵はくりかえし自分の記憶と相談しつつ、自分に対して確かめようとしていた。

名前は千絵といった。

十蔵の記憶では、維新の瓦解は千絵が十三か十四歳のころであった。徳川氏は東海地方の一大名になり、その直参である旗本衆の身分も特権も消滅した。

この時期、あたらしい政権とかつての徳川幕府とは同列だと思われていた。いわば徳川王朝と明治王朝との交代のようなものであった。明治政権は徳川家の直轄領を相続することによって最初の財政的基礎を得た。旧幕臣に対しては、

「駿府へ行って徳川家の家臣になってもよく、とどまって朝臣（天皇の家臣）になってもよい。あるいは農商になってもよい」

という自由選択の処置が示されたが、千絵のこの芦名家の場合は朝臣になろうとした。

朝臣といえど体がいいが、前王朝の徳川家の立場からみれば裏切りであった。このため旧幕臣からのいやがらせが多く、実際に朝臣になった家はめったになかった。「千分の一ぐらいの割合でしかかな。しかもそれが千石以上の旗本の歴々に多かつたのは事実です」

と、旧幕臣出身の小説家塚原渋柿園が談話速記をのこしている。

千絵の家の場合、瓦解のどさくさの最中に父の靱負が死亡し、母はそれ以前にこの世になかった。ただ一人の兄の新太郎が彰義隊に加わっていたが、彰義隊が上野の山で潰滅してから生死がさだかでない。伯父が新太郎の後見者として相続届を出したり、朝臣ねがいを出したりしてくれたが、なにぶんどさくさのところでそれらの願書がどこでどうなったかもわからぬうちに伯父も死んだ。

ともかくも千絵は本所の親戚に身を寄せた。その早々、その親戚が「自分は朝臣にはならない。無禄でもいいから駿府へお供をする」ということで、千絵も品川発の汽船に乗った。この船は米国資本の客船で、旧幕臣を安い船賃で駿河清水港まで輸送することをひきうけたのは船

長の義侠ぎぎやくによるものらしかった。

この輸送の悲惨さほど、旧幕府の末路を象徴したものは無い。小さな船に二千五百人ほどが詰めこまれ、かつては殿様とかお姫さまとかいわれたひとびとが黒人の水夫に奴隷のようにとなりつけられ、船艙せんどうの空気の悪さに発病する者も多かった。

便所は下甲板にならべられた四斗樽だった。

千絵はたまりかねて用足をしようとしたがはずかしさにそれができず、四斗樽のそばで蒼白そうはくになって立っていた。大男の黒人が笑って千絵を抱きあげ、いきなり前をめくった。用便をさせてやろうというつもりらしかったが、千絵はこの屈辱のために死を覚悟した。

この旧幕臣輸送は、まったくひどかった。かれらは人間として待遇されなかった。排泄はいせつする生物としてしか扱われなかった。船酔いと屈辱とそれに無縁無収入になるという前途への不安のために、たとえ一瞬でも自殺を思わなかった人はいなかったであろう。

千絵も、最初から自殺を覚悟して乗船したわけではな

かったが、乗船後、とても生きてゆけない、とつぶやきつづけている自分にしばしば気づいた。たれもが自分の生理的苦痛に堪えることに精一杯だったために、千絵のつぶやきに気づく者もいなかったし、たとえ気づいてもはげましの声を掛けてくれる者などいなかったにちがいない。

千絵がこの移住でかりに身を寄せた親戚というのは、大所帯だった。御隠居が二人ともそろっていたし、当主夫妻にはまだ幼い子供が三人もいた。かれらは駿河に住む家もなかったし、どのようにして毎日を食べてゆくかというあてもなかった。そのようなときに、千絵の存在はあきらかに邪魔者だったし、当主はその感情を露骨に出した。たとえば、

「兄（新太郎）を捜せばどうだ」

と、しきりにいうのである。捜そうにも、奥州へ逃げたのか、蝦夷地えぞちに渡ったのか、それとも上野の山で死んでしまったのか、手がかりもないのに捜せとはどういうことであろう。また「捜せ」ということは「駿府までついてくるな」という意味にもうけとれるし、さらにまだ

初潮があつたばかりの小姑娘にそう勧めるというのは、死ねということにひとしかった。捜すということは諸国を歩くことだろうが、この乱世に小娘ひとりが、無一文でそういうことができるとおもっているのだろうか。

夜半、船の速度が急に落ちた。

下田港に入るためだが、千絵はそのことに気づかず船艙を出ようとした。用を足すためであつた。横になつてゐる人の頭や足を踏みつけずに歩くということは至難のこととて、上甲板へのぼる階段下にたどりつくだけでも三十分かかった。そのあたりに例の四斗樽が置かれていたが、そこで用を足す気にはなれなかつた。

上甲板に出ると、そこにも人がびっしりと臥せていた。後甲板へ出た。

千絵は手すりにつかまつた。が、どういう姿勢をとれば用を足せるのか困じてゐるうちに下腹部の緊張が消え、温かい液体が腿から脚を流れた。千絵は悲しみとも屈辱とも腹立ちともつかぬ思いがこみあげてきて、やがて心気が朦朧となつた。千絵は船から海へ落ちた。飛びこんだという意志の記憶はない。

十蔵は、

——お暇を。

と言いつづけたが、薩摩の近衛士官は、

「悪かつた」

というのみで、取りあつてくれない。

十蔵にとつて気がかりは、あの娘が当家の息女だつた千絵かどうかということである。

十蔵は、かまちから離れた。

門長屋を出ると、玄関までのあいだ、かれにとつて懐しい樹々が見える。玄関の前から右へ入つてやがて台所に達するあたりにさるすべりが植わつてゐる。この樹はかれが若いころに植えたものであつた。嘉永六年の黒船騒動以前のことで、江戸八百八町はなお駑蕩とした気分のなかにあつた。

当主の芦名軋負は小普請組で、ひどく気位の高い殿様であつた。さるすべりが好きで、十蔵に注文し、はじめは玄関の近くに植えさせた。ところがこの樹のものと持主が日本橋の呉服問屋の隠居だつたときき、

「それならば、玄関は不都合である」

といって、台所のそばに植えかえさせた。

(さるすべりに身分の差があるものか)

と、当時十蔵は腹が立ったが、しかし一面この殿様のそういう格式のうるさが気味よくもあった。江戸の職人たちには、身分の高いひとが変に薄笑いをうかべて碎けた態度に出たりするとむしろ気味わるく感ずるようなところがあった。

そのさるすべりのそばを通って台所に入ると、すでに人影はなかった。

(どこへいらしたのか)

と、かまどをさわると、また火照りが残っていて、たしかに先刻みた台所と娘の光景は錯覚ではなかったようであった。

座敷のほうに灯りが見え、人の気配がした。

(座敷で御膳を召しあがっているのか)

とおもったとき、十蔵は背すじがすこし寒くなった。

朽ちはてた座敷でひとり行燈をともし膳にむかっているかつての旗本の息女というのは、まるで百物語に出て

きそうでぶきみであった。

が、哀れでもある。

十蔵はいわくびを伸ばした。

「もうし」

と、奥へ大声をあげた。

「むかしお出入りを許されておりました植木職の十蔵でございます」

——お姫さままでございましょう？

と問いたかったが、万一ちがっていればつまらぬことになる。職人ながら齡の甲斐でその程度の分別はあった。急に奥の灯がゆれた。

千絵は行燈の台を左手に持ち、右手で左胸をおさえ(帯に短刀を差し入れているのであろう)廊下にそと足を置き、やがて軽い足音をたてはじめた。

その千絵が台所の板敷の上に立ったとき、十蔵はその美しさに息をのんだ。

千絵はみずみずしくまげを結び、衣服などもうつつ着更えたのかかつての武家の娘装束の姿でいた。